

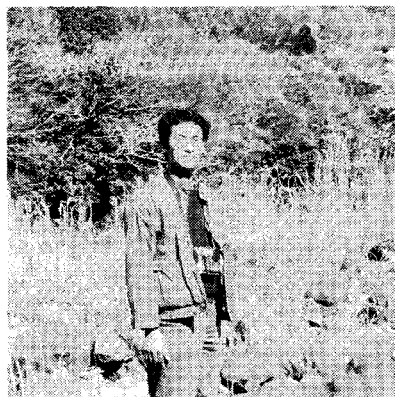
「生物多様性」で田んぼを見る

前田 琢

約3年前、つくばに来て間もない頃のことですが、調査のために茨城県の新利根町というところへ行きました。利根川下流部の低地が広がるこのあたりは関東でも有数の稲作地帯です。どこまで行ってもはるか彼方まで広がっている一面の田んぼに、改めてその広さを実感させられました。

日本中の水田がどこでもこのように広大なわけではありませんが、多くの地域で水田はごく普通に見られ、当たり前のように存在している環境です。日本の農地の半分以上は水田で、国土の7.3%を占めるくらいあります。このように豊富な存在であるだけに、日本の野生生物ともさまざまに関わりのある場と考えられます。しかし、鳥についてみると、水田における研究事例はまだ多くないのが実状です。バードウォッチングをする人は干拓地や休耕田のような場所へしばしば出かけて行きます。日本の有名な探鳥地の多くに水田が含まれています。このように、水田で鳥を見る人は多いのですが、意外に調べられていないのが水田生態系における鳥なのです。

水田は稲だけが生育を認められた特異な場所です。稲がより良く育つよう絶えず管理の手が入り、稲を脅かす生き物は虫も草も鳥もいなくなるようし向けられます。すなわち水田は農作業に強く規定されたきわめて人工的な環境です。このことが、稲と



直接利害関係のない生き物を調査対象にする機会を少なくしてきた理由の1つかもしれません。しかし、田んぼに行ってみれば、そこは決して稲だけが生きている場所ではないことがわかります。それどころか、生物多様性という観点から見てみると、水田は今後大いに注目されるべき環境でもあるのです。

水田の環境とその生物相を特徴づけている最大の理由は水の存在にあります。水田は耕作期になると湛水されて、水深の浅い淡水湿地になります。毎年春に日本中の水田が水をたたえると、琵琶湖40個分もの面積の湿地が出現するのです。水田と似たような環境は、自然には河川や湖沼の後背地などにでき、サギ、シギ、チドリ、クイナ、ガンカモ、ツル、トキ、コウノトリなど、浅い水域で採餌する水鳥のよい生息場所となっていました。しかし、このような

巻頭言

立地は開発の適地でもあり、さまざまな環境改変が行なわれて自然湿地は大きく失われてきました。もちろん、農地の開発も自然湿地を消失させてきた大きな原因です。その結果、狩猟などの影響も加わって、レッドリストに名を連ねるまでに減少してしまった種も多数でてきました。しかし、生息場所として不可欠な湿地に似た環境が、人工的なものながら水田というかたちで豊富に保たれてきたため、水鳥のなかには多かれ少なかれ水田に依存して、種や個体群を維持してきたものがあるのも確かです。同じことが水生昆虫や湿地性植物、魚などについても言えます。こうした意味で、水田は生物多様性の維持において見過ごすことができない場所なのです。

水鳥やその他の湿地性生物の保護には、本来の生息環境である自然湿地の復元が望まれることは言うまでもありません。単純化された環境である水田が、自然湿地の多様な生物相をすべて支えられるわけはありません。しかし、こうした思い切った保護策の実行はしばしば難しいものですし、広い面積での復元となると経済的にとても実現しそうにありません。そこで、水田がもつ生物生息場所としての機能を評価し、代替湿地として効果的に保全に活用していくことができないかと検討され始めたところです。「どうして田んぼで保全なのか?」「多様性の保全は自然地域で」といった考えも農業関係者にはまだまだあるようです。しかし、農業の生産基盤となっている生態系の保全を考慮に入れずにこれからの農業を存続させていくことはできないという認識が高まっていますし、また一方、これだけ豊富な農地を考慮に入れずに限られた自然地域だけで保全を成功させることも現実的ではないのです。

一口に水田と言っても、その環境には昔と現在でいろいろな違いが見られます。か

つては年中水気のなくなるしない湿田がありましたが、現在ではほとんどの水田が排水設備を整え、収穫後は土壌が乾燥する乾田ばかりになりました。湿地性が失われる非耕作期の水田が水鳥生息の大きな制限要因になっていることは、今後保全策を考える上で第一に考慮しなければならないことでしょう。排水路は従来より深く掘り下げられコンクリートを多用した構造のものが主流になっています。一方、用水路も素掘りや石積みものからコンクリート製あるいは地中配管に変えられつつあります。水田の形も小さく不定形のものから、大きな長方形に区画されるようになってきました。圃場整備によるこうした水田の近代化は、農作業の効率化や収量の増加、耐久性の向上などに貢献してきましたが、一方で水辺や水中にすむ小動物や植物には少なからぬ影響を与えています。そして、そうした生物を餌としていた鳥にも影響は及んでいます。サギ類の中でも最も田んぼに依存しているチュウサギの全国的な減少は、圃場整備と密接に関わっていることが明らかにされています。生物のすみやすい田んぼの形態を明らかにするとともに、食物連鎖を通して生物どうしのつながりを詳しく解明することが非常に重要になってきます。

水田の湿地という特性から、水鳥を主役におくのは当然のことですが、水田に見られる鳥類はもちろん水鳥に限られてはいません。とくに、冬期の水田はたくさんの小鳥の群れが見られ、それをねらう猛禽類も少なくありません。地域個体群のどれくらいが田んぼに依存しているかを知ることは、なかなか容易ではありませんが、茨城県南部ではヒバリやタヒバリのかなりの割合が水田で越冬しているように見えます。こうした、どこにでもいる普通種には保全の関心も高くなりにくいでしょうが、その個体群を支えている環境に何らかの変化があっ

たとき、普通種が危機的種になる例は今までもたくさんあります。事実、ここ数十年でヨーロッパ各国のヒバリは、農作業や農地管理の変化により大きく減少してきています。

日本を代表する環境の1つである水田は、生物多様性を視野に入れたこれからの環境政策において大きな意味を持った場所であ

ると言えるかもしれません。米作りという本来の目的と、保全という新しい目的をどう調和させて実現するかが、これから最も取り組んでいかななくてはならない究極の課題です。

(科学技術振興事業団・特別研究員
農業研究センター・鳥害研究室)

学会報告

鳥学会大会を終えて

江口 和洋

鳥学会大会は滞りなく終了し、いくつかお褒めの言葉もいただきました。ひとえに会員の方々の御協力のおかげです。今回の目玉はシンポジウムの改革でした。これからは大会シンポジウムはプロシーディングの作成を伴いますから企画段階から苦勞がつきまとうと思われます。そこで、次回以降の開催者に少しでも参考になるように、今回の経験を報告します。

'97年4月の定例評議員会で学会誌の改革の一環として、大会シンポジウムのプロシーディングを掲載する、そのために従来のシンポジウムより幾分学術的側面を強めたシンポジウムを企画するという決定がなされました。5月に大会開催を打診され、2ヶ月ほど逡巡しましたが、なんとか目途はつきましましたので、開催を引き受けました。

7月にはテーマを考えるために、編集委員の方々に電子メールや口頭を通じてアイデアを頂きました。いくつか案が出ましたが、論文まで書ける演者を揃えるというのが必須条件でしたので、ほとんどのテーマが没になり、最終的に鳥類学分野で現在進められているDNA研究を総括しようということで、今回のテーマが決まりました。

DNAを用いた技術の、生態学、系統分類学への応用は、国際的にはかなり一般的になっていますが、日本の鳥類学関係ではまだそれほど研究があるわけではありません。しかし、最近では大学や大学院で鳥類を研究する層が拡大し、生化学的手法を用いた鳥類学研究はこれから発展する可能性を持っています。これを実際に発展まで進めるには、現在の国際的な潮流と生化学的手法で何が可能なのかを認識する必要があります。世界的な趨勢としては、私が認識している限りでは以下の通りです。1) マイクロサテライトによるDNA指紋法の適用、2) 性比研究、3) MHC変異を用いた保全生物学的な分野と血縁認識に関する分野、4) mtDNAによる分子系統学的研究、5) 個体群の遺伝的構造の研究に基づく個体群変動に関するあらたなアプローチと保全生物学的分野。今回のシンポでは性比研究を中心にした行動生態学的分野、遺伝的構造研究による個体群研究および保全生物学的研究、地域個体群の系統的距離の研究、系統分類学的研究の範囲をカバーしています。そこで、これらの分野で実際に生化学的研究を手がけておられる国内の

学術会議報告

研究者に、自身の研究と関連分野の世界的趨勢を話してもらおうと言うことで、演者を選びました。

企画の意図は以上の通りです。

反省点は以下の通りです。まず、シンポジウムの時間が足りなかった。最初、演者は4人でこれで総合討論も十分に時間がとれるはずでしたが、もう少し中身を豊かにしたいと考えて5人になりました。案の定、それぞれが少しずつ時間をオーバーして、結果的には全体の予定時間を45分も超過してなお時間不足という気持ちを参加者には抱かせてしまいました。やはり、シンポジウムは演者4人が限度のように思います。

テーマと演者選びは成功だったと思っています。初心者のためにDNAの構造から説明が必要だったという意見もありました。これは、イントロダクションでやるべきだったかなとも思っています。大会シンポジウムは学会誌との連動がありますので、一定

以上の学術レベルの維持が重要だと思います。この点は、次回以降の主催者には気に留めておいてほしいものです。

もう一つ、従来のシンポジウムは公開シンポジウムの形を取っていましたので、一般の方にも理解できるような平易な内容で構成されていました。今回からはシンポジウムを学術シンポジウムの側面を強めましたので、一般の方には理解が困難な内容になりました。そこで、従来のシンポジウムの持っていた鳥類学の普及の役割を維持するために、公開講演会を企画しました。これからは、シンポジウムと公開講演会の2本立てで行くのがいいのではと思います。

学会誌の改革の一環としての大会シンポジウムの企画という大役をおおせつかって、かなりプレッシャーのある開催でしたが、自分でも満足のいくシンポジウムではなかったかと思っています。この満足感が恐い。

(九州大学・理学部・生物)

博物館紹介

滋賀県立琵琶湖博物館

亀田 佳代子

滋賀県立琵琶湖博物館は、1996年10月に開館したばかりのまだ新しい博物館です。しかしその活動の歴史は意外と長く、博物館の基本構想は開館の10年前、学芸員の採用は開館の8年前までさかのぼり、準備室時代にも調査や観察会などの博物館活動を行ってきています。現在学芸職員は31名（教育職を含む）、行政職13名、嘱託職員など15名、そしてさまざまな派遣職員やアルバイトの人まで数えると、博物館で働く人は200名近くになるでしょうか。結構大きな博物館といえるでしょう。

琵琶湖博物館は、名前の通り琵琶湖を中

心として「湖と人間」をテーマにした総合博物館です。博物館は琵琶湖のほとりにあり、館内からの琵琶湖の景色はなかなかのもので、これにはわけがあって、博物館は琵琶湖を知るためのゴールではなく、琵琶湖や地域といったフィールドへの入り口であると私達はとらえているからです。また、博物館や学芸員側から知識や情報を与えるだけでなく、博物館に訪れた方々と博物館、あるいは来館者同士が交流することによって、物、人、情報が行き交い、それによって博物館も成長・発展していくことを目指しています。そのため、展示室に

いる「展示交流員」というスタッフの最も重要な仕事は来館者と交流することであり、学芸員も交代で図書室のカウンター「質問コーナー」で来館者の質問に答えたり、展示室で解説や展示にまつわる話をする「フロアトーク」を行ったりしています。

展示室は「琵琶湖のおいたち」「人と琵琶湖の歴史」「湖の環境と人びとの暮らし」「淡水の生き物たち」（日本最大の淡水の水族展示）の4つで、地学、考古学、歴史、生物、環境など、内容も多岐にわたります（ちょっと盛りだくさんすぎて疲れてしまうという話もあります）。展示室の各所には、遊び心やこだわりをもった所がたくさんあって結構楽しめます。触ったり試してみたりと、五感を使って体験する所も多く、ある意味で「博物館らしくない博物館」というのも特徴かもしれません。

こうした博物館で学芸員は、自分の専門研究分野の他に、展示科、資料科、情報センター科、交流センター科、企画調整課のいずれかにも属し、さまざまな博物館の業務に携わっています。「学芸員は研究だけをやっていたらいい」→「利用者から学芸員が見えない」ということをなくすための体制ですが、これがなかなか大変です。時間や労力もさることながら、180度頭を切り替えてさまざまな仕事をこなしていかなければならず、その合間には一般の方の問い合わせや報道機関の取材等もあり、毎日ばたばたと走り回っています。

さて、博物館全体の紹介はこのくらいにして、ちょっと私自身の仕事についてご紹介したいと思います。私が博物館に就職したのは開館して約1か月目の1996年12月です。ですから、博物館の準備には関わっておらず、展示室の鳥のコーナーも、まだ極端に少ない状態です。現在は、観察会や標本整理などとにかく鳥に関するものは全て担当していますが、まだまだ博物館の鳥

類担当者として必要な知識と経験が不足しているため、今でも暗中模索の状態が続いています。それ以外にも前述した各科（課）での業務があり、今年度は広報・出版物の担当をしています。

研究については、現在私は共同研究として「カワウによる水域生態系から陸域生態系への物質移動とその影響」というテーマの研究を行っています。ご存じのとおり、カワウは全国的にも増加し各地でさまざまな問題も生じている鳥です。湖や河川など比較的内陸にも生息し、森林にコロニーを形成して樹上に営巣する点で、他のウ類と異なる特徴を持っています。こうした特性、つまり湖や河川で魚を捕え、コロニーのある森林に戻ってフンをするという生態は、見方を変えると「淡水域から森林へ能動的に物質移動を行っている」と考えることができます。こうしたカワウによる物質移動（ひいては森林から湖への流出により物質循環となる）がどのくらいの量であり、どのような経路をたどるのか、またそのことが水の中の生態系と陸上の生態系にどのような影響をあたえるのか、といったことについて研究を行っています。これを調べるためには、まずは食性や行動範囲などカワウそのものの生態を把握する必要がありますし、魚類生態学や陸水学、森林生態学などの研究者との協力も不可欠です。博物館にはさまざまな分野の研究者がおり、また館外の方々も共同研究に参加することができるため、カワウの共同研究では博物館内外を問わずさまざまな分野の研究者に参加してもらい、共に研究を進めています。

私が主に担当しているのは、「安定同位体比分析を用いたカワウの食性解析」と「カワウによる物質移動量と流れの把握」です。カワウやカワウのフンの炭素・窒素の安定同位体比を測定することにより、その由来と移動経路を探ろうというものです。

博物館紹介

カワウは有害鳥獣駆除が行われているため、駆除個体を各地・各季節で回収し、食性の季節変化を胃内容物の分析も含めて調べています。現在までの調査で、3月から5月にかけてカワウの餌魚種あるいは採食場所が変化していることが示唆されました。また、この分析の最大の利点の一つは、異なる組織（この場合肝臓と筋肉）を測定することにより、同一個体での食性変化が追えるという点にあります。このことを利用すると、2～3月の食性変化に2つのパターンがあることがわかりました（鳥学会北九州大会で発表）。今後はさらにカワウの分析を続けると共に餌である魚の分析も行い、食性の季節変化について詳しく解析したいと考えています。また、物質移動については、今年からコロニーにフントラップを設置し、他の研究者と協力して森林におけるカワウのフンのインプットと移動経路を調べたいと考えています。

博物館で研究する最大の利点は、いわゆる研究者以外の人達とつながりがあるということです。カワウの研究についても、カワウ対策の状況や経過については同じ「滋賀県職員」の自然保護課職員に気軽に聞くことができますし、カワウの分布や被害の実情については、地元の方々や漁師さんに

聞いたり調査の協力を求めたりすることができます。また、展示や博物館講座といった場を利用して、研究成果をじかに一般の方々に発表できることは大きなメリットです。ある部分では、研究所や大学の研究者よりも世間への影響力は大きいかもしれません。でも逆に、もし自分がいいかげんな仕事をしたら、「なんだ、研究者なんてこの程度のものか」と思われてしまい、近頃問題になっている「科学離れ」に拍車をかけてしまうことにもなりかねません。ですから、きちんとした研究を着実に続けていかなければと思っています。

博物館業界では、琵琶湖博物館は従来の枠を超えた、日本では最先端の博物館の一つであるといわれています。それはともかくとしても、とにかく、展示は楽しめるし景色もきれいなところですよ。お近くにお越しの際は是非一度お立ち寄りください。

(滋賀県立琵琶湖博物館学芸技師)

滋賀県立琵琶湖博物館

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

TEL : 077-568-4811

FAX : 077-568-4850

ホームページ : <http://www.lbm.go.jp/>

E-mail : kameda@lbm.go.jp

掲 示 板

1999年度日本鳥学会大会の日程

本年度の大会は10月9（土）、10（日）、11（月、振り替え休日）の3日間、東京大学本郷キャンパスで開催されることになりました。詳細は今後検討されることとなりますが、活発で魅力あふれる大会になるよう努力していきたいと思います。たくさんの方の参加を期待しております。

1999年度日本鳥学会大会事務局

東京大学大学院農学生命科学研究科野生動物学研究室

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 : 03-3812-2111, 内線7541 (樋口)

ファックス : 03-5689-7254, e-mail : higuchi@uf.a.u-tokyo.ac.jp

意見

「日本産鳥類リスト」を見て
～バードウォッチングの世界と鳥学界の連携について～

平岡 考

日本鳥学会誌の第46巻1号に日本産鳥類リストが掲載された。リストに付されたコメントによれば、日本鳥類目録第6版の出版が大変遅れているので、とりあえず第6版に収録する日本産鳥類リストを公表するという趣旨にもとづいている。このリストを見て、主としてバードウォッチングによる鳥の観察記録の公表に関連して感想をもったので、以下に記して会員諸兄のご意見をたまわりたく思う。おもに国ごとにその国の鳥学会が出版する鳥類目録は、その国の鳥学のもっとも基礎的な文献のひとつである。その国にどのような鳥が生息し、そのそれぞれが学問のうえでいかなる名称をもち、いかなる分類学上の位置にたち、いかなる分布をしているかを示すべきものだからである。そのような目録の最低限の必要条件は、どのような鳥がその国に分布しているかについて網羅的に示されていることであろうと考えられる。

この意味で、今回のリストを見る上で、第5版以来の日本での新記録種の扱いに注意が向くのは当然である。今回のリストを見ると、クビワキンクロ、ヨーロッパトウネン等の新記録種が本表に取り入れられている反面、コキアシシギ、ボナパルトカモメ等35種ないし亜種が検討中として本表から外されている。これら検討中の種のリストを一見して気付くことは、バードウォッチングにより観察された種がきわめて多いことである。そしてその中には、コキアシシギのようにもう20年近くも前から何回かの観察例がある種など、バードウォッチャー

の間では完全に認められている種がいくつも含まれている。検討中の種には、その理由が5つの項目をわけて示されている。その理由を見ると、多くの種が、同定への疑問からではなく、写真等の証拠がないこと、論文として発表されていないことを理由として本表から外されていることがわかる。目録が科学の成果として作成される以上、客観的に第三者が見て確実に判断できる証拠、あとから再検討できるだけの証拠が存在し、それが公刊されていることを要求するのはけだし当然のことと思う。しかしそれにもかかわらず、20年近く前から何度も出現している種が、未だに検討中という事実はどうにかならないものかと思う（私事であるが、筆者はわりあい熱心なバードウォッチャーであった1979年に、根室で教えられてコキアシシギの日本初記録の個体を観察した経験があるので、その思いは一層強い）。たしかにバードウォッチングの世界に問題があるのは事実だと思う。日本初記録のような珍しい鳥が出現すれば、大勢の人が観察して、写真も何人もの人が撮り、だれにも情報が伝わる。しかしその証拠を後の時代に残すことは多くの場合誰もしない。50年たったら、いつどこでその鳥が観察されたのか、初認はいつで終認はいつか、だれがどんな理由で同定したのか、ぜんぜんわからなくなってしまうだろうという例がきわめて多い(注1)。そのことに関して、鳥学会のある目録委員の方はいとも簡単に、「観察した人はきちんと発表する義務がある」と言われる。しかし、

意見

多くのバードウォッチャーは現在のところ、珍しい鳥を観察しても、観察の詳細や写真を含めた発表の責任が自分にあるとはほとんど考えていないと思う。かれらは多くの場合、そういう仕事はどこか別の権威（鳥学会？、日本野鳥の会？、山階鳥類研究所？）が所轄していると素朴に理解しているように思われる。単純に楽しみのためにバードウォッチングをしているかれらがそう考えたからといっていちがいに責められないであろう。しかも、仮に観察したウォッチャーが自分の責任であることを了解したとしても、彼等にいきなり論文を書けというのはかなり酷なことのようなのである。難しい野外識別のために外国の文献を読んだりするような、かなり意識の高いウォッチャーの方にかがっても、珍しい鳥の観察の論文を書くのはかなりハードルが高いとおっしゃる。今の状況が今後も続けば、遠からずバードウォッチャーは、「研究者はバードウォッチャーが20年前から認めている種をまだ検討していて、とても相手にできない」と愛想をつかしてしまうように思われる。他方、研究者は、「バードウォッチャーはこれこれの鳥を見たと言っているばかりでちっとも証拠を残すことをしない」とバードウォッチャーを軽蔑しているように見える（軽蔑しないまでも、あまり相手にしていないように見える）。こうやってどんどんお互いの距離が離れて行く一方で新しい鳥、新しい分布例だけはどんどん増えて行く。いまやたくさんのバードウォッチャーが大挙して辺鄙な離島などにでかけて次々とおかしな鳥を見つけてしまう時代になってしまったのである（ごく一握りの研究者だけが新しい分布例を発見する時代は、好むと好まざるとにかかわらず終わってしまったことを認めるべきだろう）。これをそのまま放置すれば収拾がつかなくなることは目に見

えている。その結果として、不完全な日本鳥類目録ができあがるとすれば、バードウォッチャーにとっても研究者にとっても不幸なことであろう。この状況を改善するためにはどうしたらよいのだろうか？私は、バードウォッチャーの人達は、日本初記録はもちろんだが、せめて5例めくらいまで、また興味深い分布記録や繁殖記録について、観察記録と同定理由を、できれば証拠の写真とともに、しかるべき印刷のメディアにきちんと発表して記録を残してゆく習慣を、努力してつけてゆく必要があると思う。そして鳥学界(ornithological community)、また鳥学会(The Ornithological Society)は、今後バードウォッチャーの人達に「珍しい鳥を見たら発表するものだよ」ということを知らせ、その具体的な方法を指導ないし教育する必要（と義務）があると思うのである。たんに「観察した人は発表の義務がある」と言っているだけでは事態は良くなれないと思う。くりかえしになるが、バードウォッチャーはいまや大変な時間とお金をかけて日本全国で日々、珍鳥を探し回っている。鳥学界として、そういったバードウォッチャーの人達の成果を科学の世界の共有財産に積極的にとりこむ努力をし、バードウォッチャーも研究者もその知識の恩恵に浴することができるような協力体制を作り上げる必要があると思うのである。会員諸兄はどのようにお考えだろうか。

(注1)日本野鳥の会の研究センターが、最近まで珍しい鳥の記録をまとめて、STRIXに発表していた。その努力を多とするものではあるが、初記録でもなんでも1行でかたづけて、写真があっても「写真あり」と書いてあるだけでは、第3者の検証が可能という、科学の要請には答えていないと常々考えていた。

(山階鳥類研究所資料室)

基金運営委員会から小口寄付のお願い

森岡 弘之

本会は主とし大口寄付（100万円以上）の寄付金を基にした各種の基金を持ち、その利息で、若い研究者への国際会議出席補助（1件25万円）、奨学賞の副賞（5万円）、国際鳥学セミナー、津戸シンポジウムその他を行ってきました。しかし、10年前には伊藤基金（元本1000万円）の利息だけで年に40万円ちかくあったのに、現在の低金利では、伊藤基金も含む全基金（元本約2,300万円）の利息が年6～6.5万円（推定）にしかありません。

しかし非常にありがたいことに、1998年度だけで、会員からの小口寄付（大部分は1件5,000円かそれ以下）が11件あり（別稿の寄付者名参照）、その総額は89,300円に達しました。これらの寄付金はひとまず特別会計に入り、藤巻会長とも相談のうえ、昨年度奨学賞副賞はこの寄付額から3万円を特別会計が負担し、残り2万円は通常会計から支出してもらいました。藤巻会長は、適当な候補者がいれば、今年度もこの方式で奨学賞を出したい意向で、私も異存がありません。

問題は、現在の預貯金の金利があまりにも低い。この低金利時代を過ぎれば、おそらく今度は多少ともインフレでしょう。インフレにしなければ、国の財政赤字

は埋められないと考えられるからです。インフレは基金にとってデフレ以上に大敵です。基金の前途は多難です。

このような状況で、基金運営委員会も今年度の総会で新体制になる予定です。しかし、ここでお願いしたいのは、低金利の続く間だけでも基金の低利息を補うために、**できるだけ多くの会員に1口1,000円の**小口寄付をしていただけたら、という案です。寄付はもちろんもっと多額でも結構ですが、1,000円1口で十分です。額よりも、できるだけ多くの会員に賛同していただいた方がありがたいと思います。

たとえば50人の会員が1人1,000円の寄付をして下されば5万円、100人なら10万円になります。金利0.2%なら毎年5万円の寄付があれば2,500万円、10万円なら5,000万円の大口寄付を獲得したのと同じになります。小口寄付の威力がいかに大きいかわかりただけるとおもいます。

なお、寄付金の送付方法は郵便振替が一番安く（手数料70円）簡単で、当会の振替口座は00110-0-6599日本鳥学会です。振替用紙は郵便局にありますので、郵便局にお立ち寄りの折には、このお願いを思い出して下さるとありがたく思います。

（基金運営委員長）

事務局より

○1998年中に下記の方々より、鳥学基金へ寄付をいただきました。紙面を借りてお礼申しあげます。ありがとうございました。

有馬宏幸、石川信夫、川東光三、小林貞雄、佐野清貴、島貫秀広、高野昭、高野肇、山岸 哲（敬称略）

また千葉勇人氏より切手の寄付をいただきました。ありがとうございました。

事務局より

○会員のe-mailアドレスリスト（会員氏名とe-mailアドレスのみ掲載）を作成予定です。e-mailアドレスをお持ちの方は今回同封したハガキにて御連絡下さい。

○購読会員（年会費5000円）が、正式に会則で定められることになりました。現在、団体を代表した個人名で普通会員として加入されている場合、お申し出いただければ購読会員として登録し直させていただきます。

購読会員の権利は、次のとおりです。

1) 学会誌・鳥学ニュースの送付を受ける。2) 学会関係の刊行物を割引で購入することができる。

○1998年北九州大会講演要旨集の残部が事務局にあります。希望者には1冊3000円でおわけします。

○1998年度会費が未納となっている方は、おはやめに御入金ください。（発送用ラベルの98収支がマイナスになっている方）

○事務局員柳川の携帯電話番号です。事務局につながらない時などに御利用ください。
携帯：090-8908-9936

〈お尋ね〉

池谷 英二郎, 京谷 直喜

以上の方々の住所が不明となっております。事務局までお知らせ下さい。

編集担当より

掲示板（学術会議案内や小さな集会、シンポジウムの案内も含みます）、地域の研究グループ紹介、その他寄稿は

e-mail: ywata@res.agr.hokudai.ac.jp, FAX: 011-757-5595

までおよせ下さい。（綿貫）

次の締め切りは3月31日です。

鳥学ニュース No.70

1999年2月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒080 帯広市稲田町西2線11 帯広畜産大学 野生動物管理学研究室気付

TEL. 0155-49-5500 FAX. 0155-49-5504 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 藤巻裕蔵

編集 綿貫 豊, 岩見恭子